

### III 社会貢献・地域連携推進事業連携

#### 「看護学原論 1」における学外演習プログラム報告

広島文化学園大学看護学部基礎看護学領域  
佐々木秀美 石川孝則 棟久恭子 空本恵美

##### I. はじめに

本学は学生主体の教育として特に 1.教室からフィールドへ、2.教授中心から学習者中心へ、3.受け身の学習から能動的学習へとパラダイム返還を行ってきた。そうした中で、看護学原論 1 の授業に情島演習を組み入れた教育を実施してきたのでその教育プログラムを報告する。

「看護学原論 1」の授業科目は、基礎看護学領域における科目の一つである。基礎看護学領域とは看護学分野全体の最も基本となる理論・知識の集約で、総ての看護の実践・研究に応用される看護基礎教育において教授する原論が主となっている。その領域の科目は、看護学原論Ⅰ・看護学原論Ⅱ・援助方法論Ⅰ・援助方法論Ⅱ・援助方法論Ⅲ・看護理論・基礎看護学実習Ⅰ・基礎看護学実習Ⅱであり、当該科目は学生が入学後、すぐに始まる教育であり、学生たちが入学後、看護師という仕事にまい進するための基本的な役割を担っている。

この学外演習プログラムは、2011 年 11 月に呉市阿賀地区のセンター主催で開催した「情島草刈り隊」の派遣に阿賀港に隣接する看護学部の教員と一部の学生たちがボランティアで参加したことに始まる（朝日新聞報道・NHK11/13 報道）。島内にある保健室及び診療室は閉じられ、島民は船で呉市内の病院や診療所に通っている。いくつかの家屋は無人となり、廃校となった小学校と庭に建立されている二宮金次郎の銅像がさみしい。私たちに何ができるのか学部内で協議を重ねた結果、翌年の 2012 年から新 1 年生を「島の見守り隊」として派遣することとした。その活動は新聞紙上や NHK の報道番組にも取り上げられた。

##### 1. 看護学原論 1 の授業内容に情島演習の位置づけ

看護学原論 1 の授業のねらいは「看護および看護学について歴史的発展過程も含め概観することができ、環境・人・家族における健康についての理解と基本的な看護の機能について理解を深める。」ことである。看護学は、人々の日常生活と密着している。その日常生活における問題は、いかに健康的な生活を維持するかである。情島は、瀬戸内海に位置し、看護学部が設置されている阿賀港沖にあり、面積は 0.6 km<sup>2</sup>、海岸線長 4.4 km、最高標高 126.5m という小さな孤島である。私たちが係り始めた年度には人口 13 名であったが、現在は実質 5 名である。島の人たちは、医師の定期巡回診療も保健師の巡回もなく、実際に船で呉市内の病院や診療所に通っている。そこで、本学部の学生たちが、月に 2 回程度島を訪問することによってコミュニケーションをとることができれば、島の方々に若い力の影響力を与えることが可能になるのではないかと考え、演習を授業に組み入れた。

授業は、人と環境・健康と看護という単元に位置付ける。看護師は、自身の日常生活も含め、地域と大きく関わっていることから、実際に教室内で行う授業より、交通の便が悪く、少ない

人口で暮らしている情島の住民の方々がいかに日常生活を送り、健康的な生活を送るために日々実践していることを肌で感じ取る必要があると考えたことによる。そこで、以下の演習目的を考えた。

## 2. 演習目的

1) 島の人たちが生活する場について以下の点から理解する。

(1) 人は絶えずそれぞれの社会的・文化的背景の中で固有の感性や価値観及び役割や関係性を保ちつつ日常生活を送っている。

(2) 島民の方々の日常生活上の課題について考え、解決策について考えることができる。

(3) 人が生きるということと、健康を維持するということと健康上の課題について考えることができる。

(4) 大自然からの恵みを感じとり、大自然を愛する気持ちと同時に大自然への恐れについて感じ取ることができる。

2) 島で生活する方々とコミュニケーションをとることができる。

(1) 演習で関わる全ての方々と良好なコミュニケーションを取ることができる。

(2) コミュニケーションを通して島で生活をしている方々の健康問題について考えることができる。

## 3. 交通手段

情島への交通手段は船である。阿賀港にある阿賀漁港から定期便が出ているが、他の乗客に迷惑をかけないように、船会社との連携を取り、演習用の臨時便を出していただくこととした。話し合いにより、演習計画を早めに船会社に提出し、変更があるようなら都度、連絡をすること、天候によっては欠航することがあるので、引率教員は必ず、前日の夜に船会社に連絡を取ると同時に学生への連絡も忘れないこと、基本的に阿賀発 9:00 島での活動時間は 2 時間を超えないこととし、情島発 11:30 分には阿賀港に帰港する。潮の満ち引きによって岸壁の高さが変わってくるので、時間は正確に守ることなどの取り決めを行った。運賃に対する予算措置をし、学生・引率教員の船賃は大学が負担している。阿賀漁港帰港後、現地解散とし、課題提出は、看護学原論 1 の授業の時に持参することとした。



#### 4. 演習計画の立案

表一1に示したような演習プログラムを毎年立案している。この演習は看護学原論Ⅰの授業として展開するので必要出席日数として換算している。従って、学生に不利にならないよう、海の天候状況によって演習が中止になった場合には常に予備日を入れている。

表一1 情島演習計画（平成28年度計画）

月 日	曜日	G	人数 (船の定員は13名)	引率教師	引率教員の役割
4月23日	土	1	No.1～9		1. 船の定員は船長を含めて13名。1グループの配置は定員を超えない範囲とする。 2. 教員は前日に天気上状況の把握を行い、実行可能かどうかを判断する。 3. もし、実施できなかった場合、順次、予備日に組み入れる。 4. 予備日は、変更になった日時の担当教員が実施することを原則とする。 5. 教員は参加学生の出席状況を把握し、出席記録に記入する。 6. 担当教員は血圧計を持参し、必要時、島民の健康状況を把握する。 7. 筆頭に記載された教員が当日の責任者である。学生も含め相互に連絡を取り合うこと。 8. 学生間の引き継ぎは前期は原論Ⅰの授業の終わり、夏季休暇中は、学生リーダーと担当教員が相互に連絡を取り合い、後期は石川先生の授業の中で行う事。この時、レポートの提出とスケッチブックの引き渡しを行う。
5月14日	土	2	No.10～18、11500021		
5月28日	土	3	No.19～27		
6月11日	土	4	No.28～36		
6月25日	土	5	No.37～45		
7月9日	土	6	No.46～54		
7月23日	土	7	No.55～63		
8月6日	土	8	No.64～72		
8月27日	土	9	No.73～81		
9月10日	土	10	No.82～90		
9月24日	土	11	No.91～99		
10月8日	土	12	No.100～108		
10月22日	土	13	No.109～117		
11月5日	土	14	No.118～125		
11月19日	土	15	No.126～128 編入生・欠席者、留年生2名		
12月3日	土	16	予備日①		
12月10日	土	17	予備日②		

## II. 全教員及び学生へのプログラム説明と役割周知

### 1. 引率教員へのプログラムの周知

本演習は、看護学部全教員が協力して実施できるものであることから、年度初めの教授会に情け島演習の演習計画に（表―1）について説明し、理解を求めている。具体的には、交通手段が船によることから、気候の不安定による演習実施困難について説明し、予備日を設けていること、船の定員が船長を含めて 13 名であること。学生の配置は 1 グループ 9 名とし、引率教員を含め 11 名で配置する。

### 2. 引率教員の役割

- 1) 教員は前日に天気上状況の把握を行い、実行可能かどうかを判断する。
- 2) もし、実施できなかった場合、順次、予備日に組み入れる。
- 3) 予備日は、変更になった日時の担当教員が実施することを原則とする。
- 4) 教員は参加学生の出席状況を把握し、出席記録に記入する。
- 5) 担当教員は血圧計を持参し、必要時、学生と共に島民の健康状況を把握する。
- 6) 筆頭に記載された教員が当日の責任者である。学生も含め相互に連絡を取り合うこと。
- 7) 教員が前日に自治会会長に電話をすることで先方の予定の確認ができる。
- 8) 学生間の引き継ぎについて前期は原論Ⅰの授業の終わり、夏季休暇中は、学生リーダーと担当教員が相互に連絡を取り合い、後期は石川先生の授業の中で行う事。この時、レポートの提出とスケッチブックの引き渡しを行う。

### 3. 学生への演習計画の説明と課題の提示

#### 1) 学生への演習計画及び課題の提示

学生に対しては、看護学原論Ⅰの最初の授業で、授業計画案に加え、演習計画を提示している。その際に、次のグループへのスケッチブックの引き渡し方法と、学生の筆頭に記載された者がリーダーであること、リーダーは、引率教員と綿密に連携すること、グループ内の調整役を担うことの説明をしている。

課題については、1.看護学原論Ⅰのテキストにある「人と環境・健康と看護」の内容を読んだうえで、演習の目的・目標を理解したうえで、演習に参加して学んだり、考えたりしたことをレポートすることとしている。次に、2.自身が実際に島で観察したことで、一番印象に残った植物・建物・島の風景など、をフィールドノート（スケッチブック）に絵または文字で表し、日時・自身のサインを行うこととした。色鉛筆・筆記具は自身で持参する。フィールドノートに記載された植物・生物については帰校後、図鑑などで名称を確認し、ノートに記載すれば尚良いと説明している。レポート提出期日は、前期は演習に参加した翌週の看護学原論Ⅰの授業修了までに提出し、フィールドノート（スケッチブック）は次のグループ学生に引き継ぐこととしている。

### 4. 学生への諸注意と安全対策

学生に対しては演習開始前に以下の諸注意を演習計画に記載し、口頭でも説明した。

- 1) 自分自身の行動目標を持って演習に臨むこと。
- 2) 学生らしく節度のある服装と態度をとり、危険行為はやめる。
- 3) 自分に関わる全ての人に笑顔と挨拶を忘れない。
- 4) 弁当・お茶等は自身で準備し、ゴミは必ず持ち帰る。
- 5) 阿賀港には駐車スペースがないので、車通学の学生は大学内に車を置いて徒歩で阿賀港ま

で移動すること。

- 6) 船の予定時間があるので、遅刻しても待たない。
- 7) 小雨決行です。雨具の準備は自身で行う。
- 8) 日日の暴風・波浪・大雨注意報に関心を寄せ、情報収集に努める。
- 9) 服装は季節の寒暖に適したものとし、ジャージ・運動靴等活動に適したものとする。
- 10) 現地は、雑草が多く、蚊の予防対策は自身で行う。
- 11) 乗船中、ライフジャケットは必ず着用する。
- 12) 到着したらまず、自治会長さんにご挨拶をしてください。

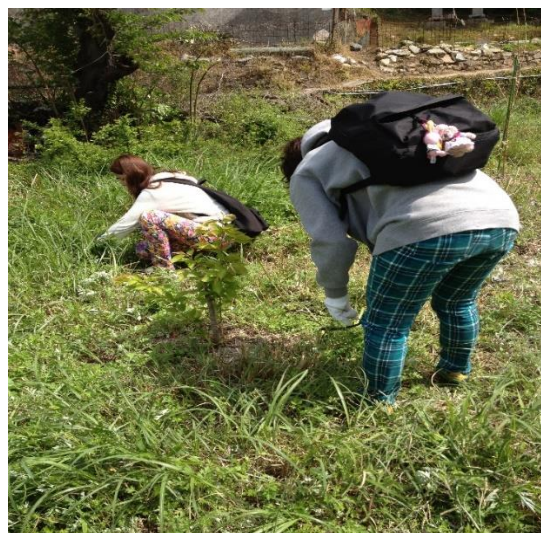
### III. 演習の実施

#### 1. 活動状況

演習は、実施計画に沿って実施した。船で島に渡ると多くの場合、自治会長さんが船付き場まで迎えに来てくださっている。学生たちは元気よく挨拶をし、自治会館に行き、会長さんのお話を聞いたり、健康チェックを行ったりする。本日の体調を伺ったり、健康上の問題があった時にはどのように病院受診をするのか、過去の経験談もお聞きしたりする。そして、日常生活上の困難なお話も伺う。特にイノシシの被害は深刻だそう。いくつか解決策を講じたが効き目がない。その後、学生たちは、旧小学校グラウンドの草むしりや植えた桜の木へのケアに当たる。桜の木が雑草に埋もれ、他のボランティア団体に雑草と一緒に刈られたこともしばしばである。これも対策を練っているが一本だけがいつも犠牲になっている。



こわごわ船に乗り込む（初めての体験者が多い）



少学校の校庭は雑草が多く、せっかく植えた桜の木が覆われてしまう。桜の木に与えた栄養剤も雑草のためのよう。





植樹した5本の桜の木がやっと姿を現した。



桜の木が目立つように棒をつけてみよう。



イエー、やったぞ。葉っぱは少ないが一番背の高い桜の木と自分たちの仕事に感動！



やっと姿を現したこの桜の木は、最も背が低く、雑草に覆われて息が出ないほどであったが、葉っぱはしっかり出ている。これでは、他の除草団体に根っこから切り落とされかねない。

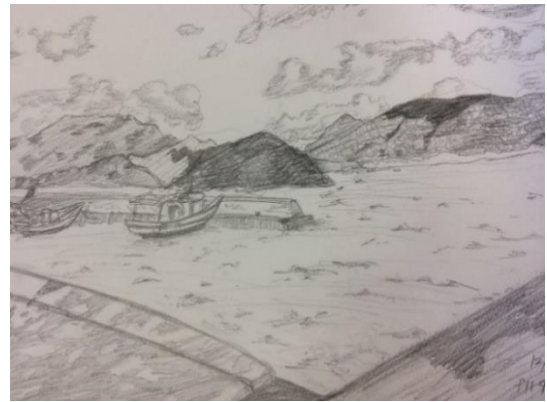
## 2. フィールドノートについて

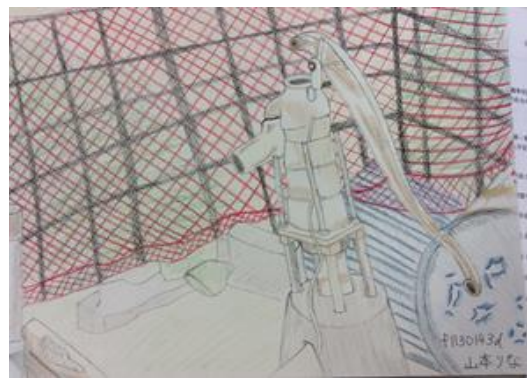
学生が実際に島で観察したことで、一番印象に残った植物・建物・島の風景など、をフィールドノート（B4のスケッチブック）に絵または文字で表し、日時・自身のサインを行うこととした。以下に学生のスケッチを添付する。学生たちがそれぞれに感じたことが絵には表現されているように感じられ、写真とは一味違う趣となっている。フィールドノートに記載された植物・生物については図鑑などで名称を確認することを課したが、実際にはスケッチすることだ



けで精いっぱいのものであった。

学生たちの描いたスケッチブックは、なん十冊にもなっている。学生たちの思い思いが絵に表現され、素敵な絵がいっぱいであり、歴史的である。その中から、一部を紹介する。





#### IV. おわりに

学生たちの演習への興味・関心度は高く、欠席者はほとんどいない。また、たまたま欠席することがある場合でも、事前事後に申し入れを行えば、可能な限り、日程の調整をし、参加可能にしている。予備日を活用したり、学生間で交代したり、その旨を報告したりするなど学生も常識的な対応ができています。レポートの内容については、若干、感想文に偏っているが、内容から考えると提示した目標のいくつかに係った文章になっているので、今後の課題としたい。

フィールドノート（スケッチブック）は、島の様子がわかるものであるが、個々に関心のある事象が違うことは明らかである。島は人の住まなくなった家々がそのまま残されている、雑草が屋根まで覆いつくしそうになっている、あるいは崩れ落ちそうになっているなど、人口も含め、都会に住んでいる学生たちには非常にショッキングな様相である。そうした状況下で小さな植物や海の青さの中での小さな魚たちを描写している学生たちの感性の良さが感じ取れる。感性は、五感につながり、五感の発達、患者のケアの際の観察力の高さにつながっていくと考えられることから、この情島での演習は効果的であると考えている。

当然のことながら、島で生活している方々は、高齢化している。島の方々は、古くからある小学校（現在は廃校）を自由に使ってよいと話されているが、校庭に桜の木を植樹したのみで、今まで、校舎内に立ち入ってはいない。今後、演習をどのように企画していくかは、次の課題としたい。

また、授業評価については、実際にレポート内容から、目的・目標の達成度を分析したりしていないので、今後の検討課題としたい。